

北海道釧路市沼尻遺跡の出土遺物について

沢 四 郎
西 幸 隆

は し が き

昭和36年6月24日、当時釧路工業高校在学中の伊藤政和君は学校遠足の帰途、宅地造成中の本遺跡を踏査し、石槍2点、大形の円形搔器1点、長軸の石錘9点を採集し、釧路市立郷土博物館へ立寄られた。同君は翌25日、平塚翼次君とさらに踏査を重ね、長軸、短軸の石錘29点、条痕文工器の小片4点を採集し、筆者の一人沢のもとに持参された。こうしたことから緊急発掘を計画したが、諸般の都合で日程がとれず、同年7月7・8・15・16・22・23の6日間に亘る調査にとどまった。これらの調査は勤務の都合もあり、早朝、休日の午後という悪条件下のもとにおこなわれた。しかし既に時期を逸し、この間に遺跡所在地の宅地造成はとどこおりなく進行し、僅かに包含層の一部を残したのみで削平されてしまった。したがって調査そのものは遺物採集の領域を出ないものとなったのが悔まれる。

このようにして、本遺跡の遺物は10余年を経過した。発見当初、土器については、一括遺物として捉え、道東における縄文早期の平底鉢形土器群の中の一型式とみなし、沼尻式と仮称、編年の位置についてしばしば論及してきた。が石器に関してはまったく未公表の状態まで今日に至っている。よってここでは本遺跡出土のほぼ全資料について紹介し、若干の考察を試みたい。

本稿を草するに当たり、調査の端緒を与えられた伊藤政和君、図版作成に協力された山本文男君、標茶町の遺跡につき御教示を得た豊原熙司氏、石質の鑑定をいただいた北海道教育大学釧路分校教授岡崎由夫氏に対し、ここに銘記して感謝したい。

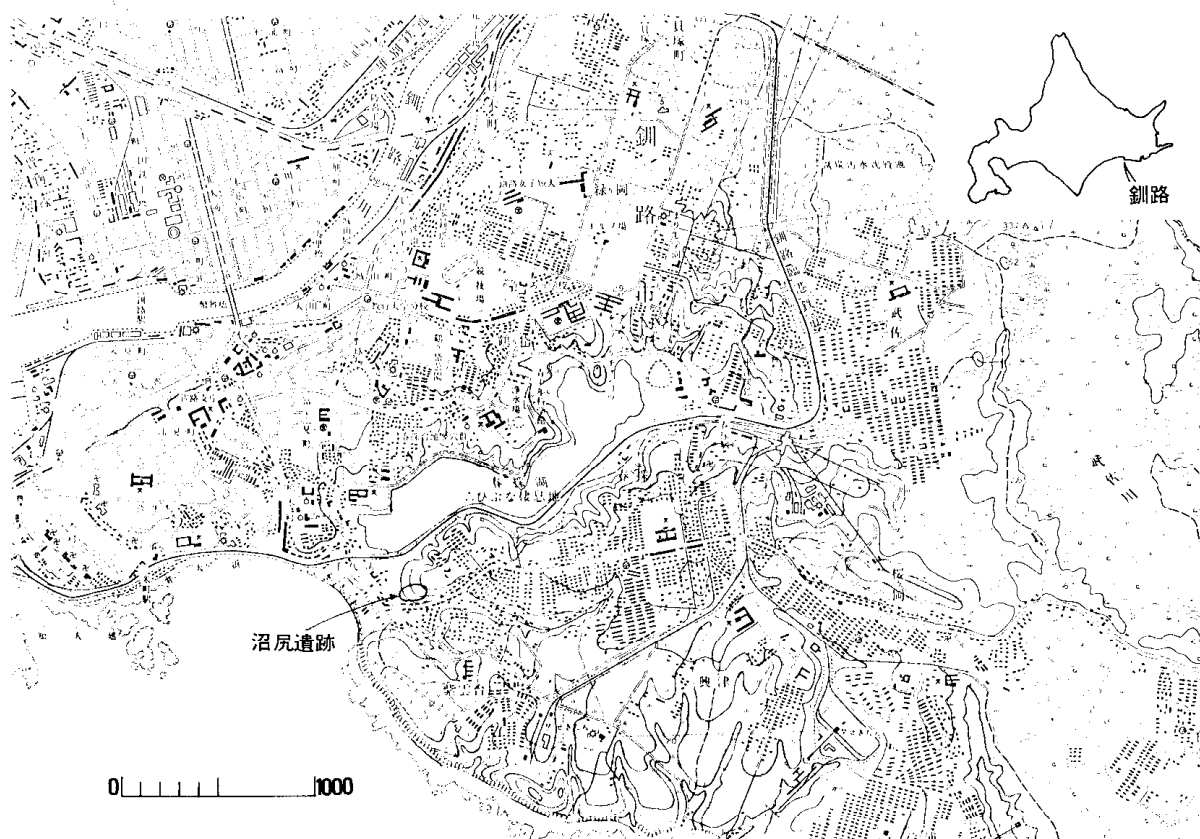
なお本稿の執筆は勤務を同じくする二人がこれにあたり、主に石器を西が、土器その他を沢が担当した。

1. 遺 跡

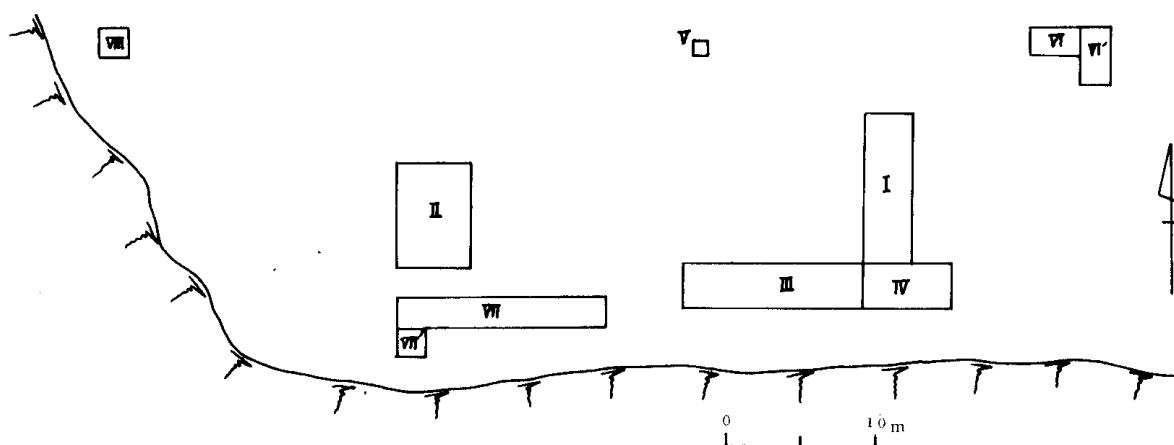
釧路市の台地は、旧釧路川左岸にはほぼ並行して位置する釧路段丘から成り、南側は太平洋へ面して急崖を呈する岩石海岸をもち、東側へと更に連なっている。釧路市をのせるこの釧路段丘は、やや屈曲して延びる春採市街地および春採湖をもつ低地によって切断されている。切断された段丘は海岸線にむかって湾入し、舌状を呈して春採湖に面する。

遺跡は、舌状に延びる東側の標高30mの海成段丘上におよそ210m²の拡がりをもって存在した(第1図)。遺跡の北側は比較的急な斜面で春採湖に面しており、春採湖の北西、南東側においても同様な傾斜面によって形成されている。遺跡の南側はわずか250mで海岸線へ達することができる。更に西方300mで相対する舌状の段丘も同じく急崖をもって太平洋および春採湖に面している。

発掘は千代ノ浦海岸に面して突出した台地の南側、道々釧路—昆布森線の崖沿い長さ70m、巾30m



第1図 釧路市沼尻遺跡の位置



第2図 発掘区 の 配置

の間に遺物の散布が限られることから、この範囲内にⅠ～Ⅷまでの発掘区を設けておこなった（第2図）。これらの発掘区は既にふれたように、僅かに遺物包含層が削平をまぬがれ、若干の落ち込みをみせ、残存していた個所である。包含層は赤土層の上に2層に分かれていた。上層は、その本来の厚さは不明だが、厚さ5cm内外の黒褐色土層である。遺物は、この下層の包含層中より多く出土した。

出土遺物の傾向を各発掘区別にみた場合、土器は第Ⅰ、第Ⅳ区に集中し、次いで第Ⅴ区、第Ⅶ区からも出土したが他の区からは出土していない。黒曜石製の石器は各発掘区に散発的にみられたに

過ぎないが、石錘は第Ⅰ、第Ⅲ、第Ⅳ発掘区および第Ⅱ、第Ⅶ、第Ⅷ発掘区に集中している。本遺跡出土の石錘のほとんどはこれらの区から出土したものである。また第Ⅶ区においては、蛋白石製の石槍1点が出土し注目された。

遺構としては第Ⅰ発掘区において石囲いの炉址が認められた。50cm×70cmの焼土北側に接し板状の砂岩4枚によりそれを囲むような形状で検出されたが南側はブルドーザーで削られてない。この周囲から完形土器1個（第5図）と石錘11個が出土している。また東側では焼土に接し、径90cmの範囲に無数の黒曜石からなるchipsが出土している。同様の例は第Ⅷ発掘区においても認められ、石錘が出土している。第Ⅶ発掘区においては径80cm、深さ60cmの円形pitが検出され、底面直上に凝灰岩製の砥石が出土した。ともあれ、本遺跡における各発掘区はブルドーザーによりフラットに剝土された中で、若干落ち込んだ個所に遺物が集中的に出土したものであり、何らかの遺構の存在が考えられよう。

2. 出土遺物

(1) 土器

総数266片の土器が出土している。整理の結果、完形及びそれに近い個体3、底部7、その他5の約15個体分を検出し得た。これらの土器は、いずれも胴部上半から口縁にかけて内外面に厚さ2mmほどの黑色炭化物が付着していた。色調赤褐色を呈し、胎土には細礫をまばらに含むが繊維の混入はない。器形は平底の深鉢、底部は「くの字状」の張出しをみせず底面へと移行し、第4図、第5図に示したように共通した断面形態をとっている。土器の厚さは胴部の計測値において6.5mm～7mmの範囲に集中し、8mmを越えるものは稀れである。胴部にみるこの厚さは、底部において若干厚みを増し、口縁部へ移行するにしたがい、薄くなる。口唇は差程明確ではないが、外側に向って僅かにそいのような傾向が全体に窺え、これが本遺跡出土の一群の土器の共通した特徴ともなっている。土器の文様は貝殻条痕文を基調とし、貝殻腹縁圧痕文、沈線文が加わり、他に整調痕程度の擦痕を有する所謂無文土器が別に存在する。これらの土器は、山形突起を有し口縁部の外反する平底の深鉢と余り外反しない平縁の平底深鉢の2類があり、さらに細分が可能である。

第1類土器 口縁に山形突起を有する土器類である。突起の頂部から下に向い、口縁部方向から器面に対し斜めに施された刺突文が縦に点列するのが特徴的である。これらは文様の組合せ及びそのくせから次のa～eに細分できる。

a：横位または斜位の貝殻条痕文の施文された土器である（第3図1, 2）。条痕は浅い。1では刺突文は明瞭でないが2は米粒状の刺突が認められる。条痕文原体の巾は、土器面にみる一単位の中が7mmを越えないところから、そう巾広いものではない。条痕そのものは、施文にあたって、器表に強く、内面に弱くより浅く施されている。口縁は内外ともにそいのような形状を示すが、特に外側のそれが際立っている。1の推定口径は180mmを算する。

b：口縁部から胴部にかけて、ほぼ2条を一単位とする条痕文をまばらに施し、その空間を貝殻腹縁圧痕文で埋め、胴部下半から底部にかけて横位の条痕文を施した土器である（第3図5, 7, 14, 15, 第4図16）。この土器の場合、施文原体の貝殻は殻表を下にして器面を突き上げるようにし、密に施文する。14は口縁部破片、15は口縁に近い破片、16は胴部上半から底部にかけての破片、5,

7は胴部下半の条痕文の部分の破片である。すべて同一個体、1個体分の破片であるとみられる。14には2列からなる刺突が観察される。15の条痕にも一点刺突が認められる。しかし16にはない。これは同一個体における異なった部分の破片であろう。

c : bに似るが、地文として比較的中の広い浅い条痕文が、口縁に3条内外の貝殻腹縁圧痕文をめぐらし、胴部においてはまばらに横走する特殊な貝殻腹縁圧痕文を施文した土器である（第4図17, 18）。17, 18は同一個体の異なった部分である。口縁断面は外側を若干丸味をもたせながらなでそいのような形状を示している。ゆるやかな傾斜の山形突起を有する土器とみられるが、この部分を欠き、したがって刺突文の施文の有無は詳かでない。器面は軟かい光沢を有し、bとは明らかに異なった個体群に属するものである。裏面に浅い条痕が横走する。

d : 第5図3により示される土器である。4個の突起を有し、2条乃至3条を基本とする条痕文が肋骨文風に描かれ、突起下に米粒状の刺突文が胴部下半まで及んでいる。実測図には現われていないが、口唇付近に巾10mmほどの櫛歯状工具による圧痕と見間違えるより鋭い貝殻腹縁の圧痕が3個みられる部分がある。内側には横走する条痕が底部近くまで施文される。器表は光沢を有している。口径185mm、底径70mm、高さ190mmを算する。

e : 第3図12, 13に示した土器である。b, cとした土器の文様構成に近いが、別物である。2条の太目の沈線によって区画された中に殻表を上にして器面に対し直角に近い角度で貝殻腹縁圧痕文がやや規則的に施文されている。底部近くは無文になるらしい。12, 13ともにこのグループ特有の刺突文がみられる。同一個体である。

第2類土器 平縁、平底の鉢形土器である。無文と条痕文の2類に分けられる。

a : 無文土器である（第5図1）。胎土に他の土器に比し細礫、砂を多く含む粗雑な土器。胴部は若干膨みをもつ。焼成不良。底部を欠くが、これは胴部下半が火熱を受け脆くなっていることによる。口径200mm、現存する高さ230mmである。

b : 格子目状に条痕文が施された土器である（第5図2）。条痕文の施文原体は巾3mm～5mmの貝殻腹縁である。土器内面の条痕は第1類dの土器同様、底部近くまで及んでいる。条痕は口唇にもみられ、刻目状になっている。器表に数箇所赤色塗彩がみられる。口径195mm、高さ230mm、底径90mmを算する。

底部 底部のみの土器が7個体分出土している（第3図10, 第4図19～24）。底部の断面ははじめにふれたように共通した特徴をもっている。19は貝殻腹縁圧痕文がみられる唯一の例である。内面の条痕はない。10は底面を欠くが表面に横位の条痕、内面に縦位の条痕が観察される。20, 21は浅い条痕文をもつが内面にはない。20は底面に部分的に条痕をもつ。22, 24は底面に条痕を有する。23は無文の底部である。

(2) 石 器

第6図42, 44を除いていずれも沼尻式土器に伴出した。黒曜石製。石錘については出土資料のすべてを図示し、詳細は別表およびグラフに示したとうりである。尚これらの他に、図示資料を含めた石器の作出過程の中で生じた剥片が比較的多く502点出土した。平均2cm程の石刃様の長めの剥片と共に3cm程の同例が多くを占めている。このような規則的な剥片とは逆に極端に破折された剥片

が全体の24%を占めていることを附記する。

石鏃（第6図1～8）形態的には三グループに細別できる。1～3は長茎鏃。表面は全縁にわたり押圧剥離が施され、主剥離面は側縁部のみに加工がみられ、いずれも共通した特徴を備えている。観察された使用痕については三例とも異った結果が得られた。1は主剥離面先端部から12mmにかけて、一、二次加工の接点に磨耗痕がみられ、表面中央下部に横走する擦痕が観察される。2は主剥離面上部に細かい擦痕が縦、斜走する。3は表面上部で縦、斜走し、主剥離面基部附近では長くて8mm（2条）、短かくて3mm数条が縦走する。

4～7は比較的中広い石鏃で基部は彎入、平基と両形態をもつ。前述したグループとは形態的な異りを示しながらも、主剥離面にみられる側縁部に対する二次加工は共通する。7は両面とも全縁に加工が施され8と共通するが、4～6のそれは粗雑な剥片を利用しており、二次加工は先端部附近に集中する傾向を示している。擦痕は4において顕著である。表面先端部で縦走する数条の擦痕がみられ基部附近では稜線の磨耗が著しい。5では主剥離面中央部に若干横走するがさほどでない。7は4と同様、基部附近の磨耗が著しい。8は数条の縦走する擦痕がみられるが、むしろ上部附近で横走する。

石槍（第6図9） 石槍としての分類に難はあろうが本類とした。表面のみに押圧剥離が施される。中央部縦の稜線が磨耗し、表面中央部よりやや下部附近で縦横の擦痕が断続的に走る。主剥離面基部附近では横走するが表面ほどでない。

搔器（第6図10～16, 28） それぞれ刃部形態に異りをもつ。10は両側縁、下端部に比較的急傾斜をもつ刃部を作出し、主剥離面下部では刃部から縦走する擦痕がみられる。やや濃密に縦走しており、長い擦痕で11mmを計る。交差した形で斜走する擦痕がみられるが数条のみである。表面の稜線は極度に磨耗している。11～13は傾斜した右側縁部に緩やかな刃部を作出する。13では主剥離面の刃部面にむかい横走する擦痕が数条走る。14は舌状の刃部形態を示し一端部を欠く。長めの石器の一端部の如き形を備えるが、主剥離面にみられるバルブの位置からはそうとは考えられない。擦痕は主剥離面左側縁部に集中して縦走する。15, 16は中央両側縁部にやや浅い抉入を施し、両者とも一端に刃部をもつ。刃部附近の擦痕は15では観察されず16においてわずかながら細かい単線がみられる程度である。28では両端部を破折しブレード状に剥離された剥片を素材とし、左側縁部のみに二次加工が施される。しかし、主剥離面にみられる擦痕は右側縁部両面に縦走して比較的長く表面の稜線も磨耗する。

グレーバー（第6図40） 両側縁に上部からの打撃による剥離面をもつが、本来のグレーバーファシットを留めているのは右側縁部の一面のみである。

剥片石器（第6図17～27, 29～39, 41） 粗雑な剥片を利用して側縁部の一方に加工を施した例が多い。17は、15, 16と類似する形態をもつ。主剥離面中央部附近に7～8条（一度の接触で3～4本の擦痕が施されて1条とみなした場合）の細かい擦痕が横走する。定形的ではないが、特に27, 30, 31に代表されるように、一方の側縁部に細かい二次加工を施した剥片石器が多くを占め、本石器群のひとつの特徴を示す形態であろうと理解される。このような意図的に作出された刃部形態と擦痕との関わりあいについて観察してみた。22, 30, 31, 36では明らかに刃部から横走する擦

痕がみられるがさほどでない。41のみ側縁部に横走する。22は破損例であるが、両側縁部に二次加工を施し、主剥離面に加工をもたないが、縦、横、斜走する擦痕が入り込んで観察された。同様な例は26に求められる。

磨製石斧（第6図43） 細粒砂岩質。片刃の刃部形態を備え比較的脆い。刃部は図において鮮明ではないが磨耗が著しい。しかし、一面において斜走するわずかの擦痕がみられる程度である。

42, 44は異った時期の所産と考えられる。42は蛋白石質の尖頭器。側縁部の加工は先端部と基部に若干施されるのみで極めて粗雑である。裏面においても全縁加工が施されるが剥離方向が一定でない。沼尻式土器より更に下層部の黄褐色土から出土したが時期的には定かでない。44は短剣様石器。むしろ搔器的機能を最大限に考える必要がある。このことは、中央下部における磨耗痕のあり方からも窺うことができる。

石錘（第7図～第13図） 148点出土した。詳細については別表およびグラフに示したとうりである。打ち欠きは一方の面において一方向から施されることが多く、両面に剥離面を留める例は極めて稀であり、53, 72, 101に代表される程度である。また、36のように側縁部に敲石としての痕跡を留めている例もみられ、11にも同様な痕跡を窺うことができる。

形態的には三グループに細分できる。長軸、短軸および長短両軸に打ち欠きを施したものがそれである。そのうち短軸は26個で全体のおよそ17%に及び、長短両軸のものはわずか2個にすぎない。このような形態的なあり方は第2表においても明らかなように、重量との関りあいについても考慮する必要がある。

敲石（第14図1～5） 1～3はいずれも側縁部を利用している。1, 3は極度にその痕跡を残し、敲打痕が著しい。4は中央の平坦面に敲打痕を残し両面に施される。珩質凝灰岩質。5は玢岩質で側縁部に敲打痕をもつが比較的少ない。

砥石（第14図6, 7） 6は不定形な原材を利用し、一端部に巾11mmの三条の磨耗痕をもつ。軽石質。7はスコリア凝灰岩質。側縁部附近が磨られているが一方の端部を欠く。

第1表 石 錘 一 覧 表

No.	長	巾	厚	重量	石 質	No.	長	巾	厚	重量	石 質
1	95	63	32	270	Basalt	15	82	73	22	180	Dac.
2	113	67	18	210	F.Ss.	16	78	77	22	200	F.Ss.
3	95	61	19	190	C.Ss.	17	80	62	22	150	Rhyol.
4	—	—	20	—	Basalt	18	70	63	15	100	F.Ss.
5	86	63	18	180	Basalt	19	116	77	21	280	Slate
6	97	72	28	320	Granite	20	86	59	21	180	Dac.
7	52	43	15	50	F.Ss.	21	86	78	19	180	And.
8	95	73	25	240	F.Ss.	22	95	61	21	180	Tf.Breccia
9	72	61	19	140	And.	23	74	59	18	130	F.Ss.
10	69	55	25	140	Tf.Breccia	24	89	66	20	210	F.Ss.
11	90	85	27	300	F.Ss.	25	83	62	25	210	Granite
12	75	61	21	150	F.Ss.	26	90	74	22	210	F.Ss.
13	86	63	22	160	And.	27	72	62	15	120	F.Ss.
14	75	73	19	130	And.	28	55	47	16	60	Granite

№.	長	巾	厚	重量	石 質
29	62	55	17	80	F.Ss.
30	98	68	24	240	F.Ss.
31	79	78	29	220	F.Ss.
32	84	80	23	240	And.
33	56	52	15	70	C.Ss.
34	55	52	21	90	And.
35	49	38	11	30	F.Ss.
36	85	68	22	190	Slate
37	63	55	15	80	Granite
38	82	75	20	200	F.Ss.
39	92	68	23	180	And.
40	68	44	13	50	And.
41	88	73	25	180	And.
42	83	78	25	230	And.
43	76	62	19	140	And.
44	71	55	20	110	F.Ss.
45	77	69	24	180	And.
46	63	55	17	90	C.Ss.
47	66	56	15	80	And.
48	98	85	28	320	F.Ss.
49	60	49	11	60	F.Ss.
50	72	65	24	150	And.
51	98	72	22	230	F.Ss.
52	58	53	14	50	F.Ss.
53	88	88	29	330	Granodiorite
54	91	72	26	260	And.
55	66	58	21	120	Granite
56	94	85	23	210	And.
57	81	51	14	90	F.Ss.
58	88	75	20	200	Granite
59	80	62	16	120	F.Ss.
60	65	44	16	70	Dac.
61	54	51	13	50	F.Ss.
62	83	51	14	90	F.Ss.
63	91	68	21	200	F.Ss.
64	70	48	16	80	F.Ss.
65	75	69	23	180	C.Ss.
66	90	84	24	260	Dac.
67	70	66	21	160	Granite
68	95	75	29	260	F.Ss.
69	88	77	16	140	Dac.
70	83	82	25	250	C.Ss.
71	81	66	17	150	Porphyrite
72	98	78	25	290	And.
73	88	75	22	210	F.Ss.
74	91	89	21	260	F.Ss.
75	73	70	18	140	F.Ss.
76	71	63	15	90	And.
77	65	47	20	90	And.
78	74	69	19	160	Granite

№.	長	巾	厚	重量	石 質
79	63	60	18	100	Slate
80	62	47	15	80	And.
81	76	54	18	110	And.
82	78	50	14	80	And.
83	61	48	21	90	And.
84	81	54	21	140	And.
85	48	42	11	40	And.
86	78	70	26	200	And.
87	67	56	20	110	S.Ss.
88	76	46	15	80	F.Ss.
89	81	60	24	180	And.
90	82	62	17	120	F.Ss.
91	82	52	21	130	Basalt
92	74	62	20	140	And.
93	67	60	16	100	C.Ss.
94	58	55	12	60	F.Ss.
95	76	53	17	100	Slate
96	64	51	14	70	Slate
97	80	68	27	210	F.Ss.
98	68	63	22	140	And.
99	—	—	19	—	F.Ss.
100	81	66	14	120	C.Ss.
101	71	66	18	120	And.
102	64	57	15	100	Granite
103	57	50	19	90	F.Ss.
104	63	51	16	90	F.Ss.
105	65	56	17	80	Tf.Breccia
106	66	58	13	80	Dac.
107	64	61	16	100	And.
108	61	54	19	110	F.Ss.
109	69	53	20	110	Basalt
110	76	59	20	120	C.Ss.
111	56	53	19	80	C.Ss.
112	55	48	16	50	C.Ss.
113	51	40	13	20	Slate
114	56	52	11	40	F.Ss.
115	52	45	12	40	F.Ss.
116	54	49	11	40	F.Ss.
117	—	—	19	—	C.Ss.
118	62	44	16	70	F.Ss.
119	—	58	18	—	And.
120	65	—	11	—	F.Ss.
121	—	47	11	—	F.Ss.
122	—	—	—	—	And.
123	42	39	12	20	Slate
124	—	—	22	—	F.Ss.
125	—	—	16	—	And.
126	88	61	20	160	And.
127	78	67	17	120	C.Ss.
128	75	55	20	150	C.Ss.

No.	長	巾	厚	重量	石 質
129	59	51	15	60	F.Ss.
130	76	60	24	150	And.
131	70	59	17	110	F.Ss.
132	—	55	19	—	Dac.
133	70	62	14	70	Dac.
134	63	60	16	100	F.Ss.
135	65	65	14	60	Dac.
136	—	47	11	—	Dac.
137	74	64	29	180	Tf.Breccia
138	64	56	16	90	Granite

No.	長	巾	厚	重量	石 質
139	66	64	16	100	And.
140	62	40	11	40	F.Ss.
141	60	50	16	60	And.
142	81	70	16	150	F.Ss.
143	74	46	16	70	Slate
144	103	78	15	160	Dac.
145	47	46	16	40	Rhyol.
146	—	57	14	—	And.
147	—	—	—	—	And.
148	53	50	16	60	F.Ss.

— 石 質 略 号 —

珧質砂岩	S.Ss.	花崗閃緑岩	Granodiorite
細粒砂岩	F.Ss.	玄武岩	Basalt
粗粒砂岩	C.Ss.	粘板岩	Slate
安山岩	And.	玢岩	Porphyrite
石英安山岩	Dac.	流紋岩	Rhyol.
花崗岩	Granite	凝灰角礫岩	Tf.Breccia

3. 考 察

遺跡の位置する台地は長さ250m、巾220mを計り、その総面積は55,000㎡を有する比較的起伏の変化に乏しい平坦な台地である。この広い台地にあつて、出土遺物は、南崖線沿いに東西70m、南北30m、面積にして210㎡という極めて限られた小範囲なものとなった。また出土した土器は胎土、焼成、色調、器形の細部に亘る「くせ」や文様において共通した特徴を持っている。さらに出土層位をも同じくし、他の異なった時期の遺物がみられないということなどから、ほぼ一括遺物とみて差し支えないと考える。このようなことからこれまで本遺跡の土器を沼尻式と仮称してきたが正式名称とし、道東地方における縄文早期の平底を有する鉢形土器群の一型式としたい(沢1962a, b, c)。

さてこの沼尻式の分布及びその編年的位置づけであるが、これについては、過去に論及しており(沢・1961, 1962, 1969, 岡崎, 沢1970) 根本的にその見解に誤りはないと考えているので、ここで再述しない。少なくともこれまでの資料では、道東における縄文早期の土器群の中では東釧路Ⅰ式より古いことは確かであるといえるということにとどめておく。

貝殻文をもつ平底土器群に伴出する石器は現段階においても十分に検討できる程の材料に恵まれているとは言えない。しかし、本遺跡からは比較的まとまった資料が得られている。

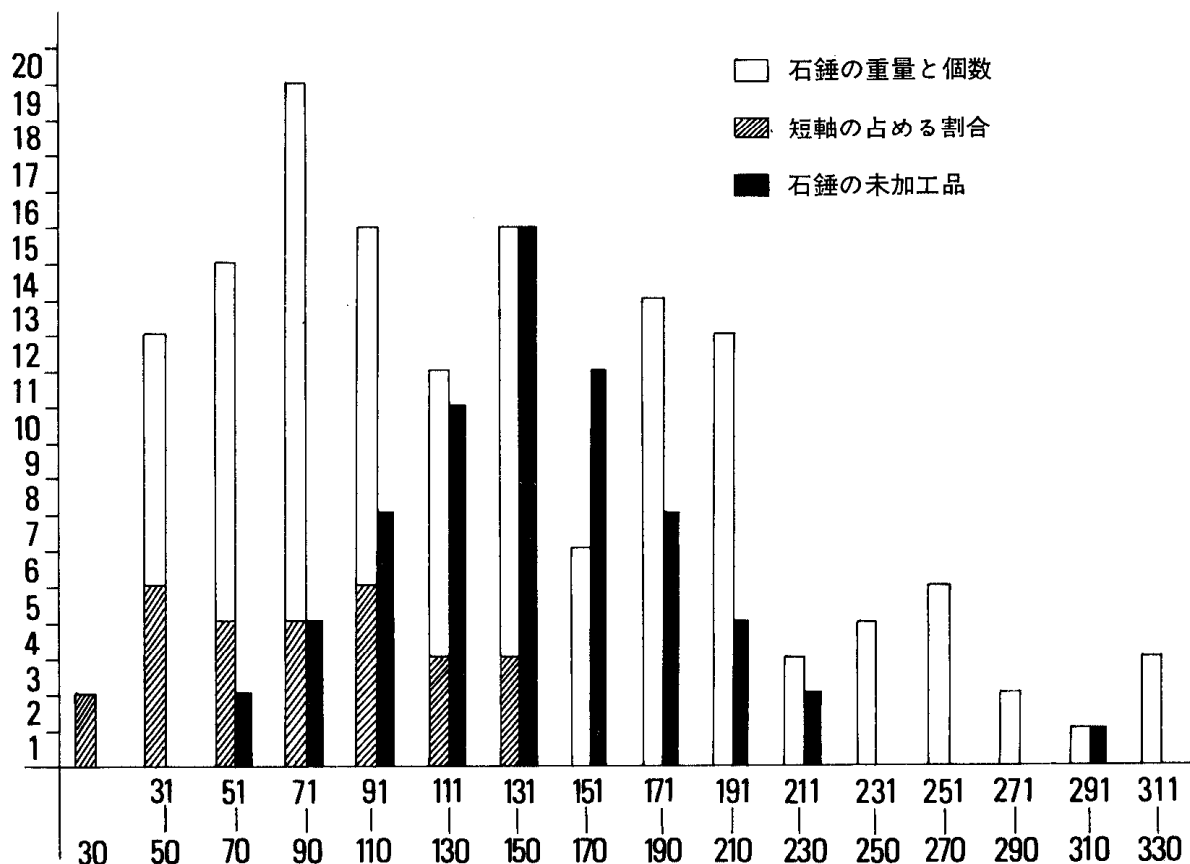
石鏃、石槍、搔器、グレーバー、剥片石器、石斧、石錘、敲石、砥石等に関しては、伴出石器群として広く取り上げられてきたところである。個々の特徴的な資料についても長茎鏃、グレーバーが問題視されてきた(吉崎1965)。しかし、石鏃もこの長茎鏃を含めて三形態に細分される。巾広いやや正三角形を呈する石鏃は、本遺跡における特異的なあり方と考えられる。長茎鏃は平和遺跡(明石1971)、大樹遺跡(大場・棚瀬1965)においてもみられるように普遍的なあり方を示している。

技術的にも主剥離面の側縁部に二次加工を施す形態は、石鏃のもつひとつの特徴として捉えなければならない。同様な例は、東釧路遺跡第Ⅰ地点において東釧路Ⅰ式土器に伴出して出土している（沢他1971 a, b）。形態的な相異はあるが、先端部の作出を重視した加工と考えられる。

剥片石器については、前述したとおり側縁部に細かい加工を施し、やや直線的な刃部を作出したグループがある。これらは一例を除いて擦痕が刃部から横走して観察された。平和遺跡においても同様な剥片石器が下頃辺上層式土器に伴出したという。側縁部に直線的に細かい加工を施すあり方は、木村台地で「木村型植刃石器」（峰山1963）と呼称したグループと共通した要素をもっていると考えられる。

グレーバーは既に吉崎昌一氏によって指摘されている（吉崎1965）。擦痕の示す方向性が、グレーバーの機能を満たすとは考えられない点もある。しかし、形態的には十分にグレーバーとして分類できるものであり、同例を虎杖浜遺跡に求めることができる（大場・扇谷・竹田1962）。

石錘は多量に出土し148個を数えた。尖底貝殻文土器をもつ石器群とも共通しており、住吉町遺跡ではおよそ600個（児玉・大場1953）、梁川町遺跡では55個（大場他1955 a）、平底のグループでは、上ノ国大潤遺跡で79個（大場他1955 b）、平和遺跡では、下頃辺上層、下層の伴出例をあわせると702個（明石1971）、女満別飛行場台地では113個出土（大場・奥田1960）している。個々の形態については大樹遺跡（大場・棚瀬1965）で8個出土した全例が短軸、虎杖浜遺跡で長軸7、短軸11例という結果が得られているほかはまったく不明に等しい。本遺跡の結果は別表グラフに示したとおりであり、本遺跡に限って、重量との関りあいでは短軸形態のものは150 g 以下に求められた。これらは全体の17



第2表 釧路市沼尻遺跡出土の石錘重量分布表

%を占めるが、両形態の個々の関係について積極的に論ずる材料は見当らない。虎杖浜遺跡の報告者が、厚さについて触れているが、重量と共に打ち欠きを施す作出過程の中で形態を考慮して意図的に分離されたとも考えられる。しかし、一般的には主体が長軸である点是指摘できるにせよ、詳細な差を各遺跡に求めることは困難であり、空間的、時間的差まで立ち入って論じることは不可能に近い。しかし、既に論じられているような(沢1962d, 河野・沢1962)機能的な両者の関りあいについては今後更に検討を要するものと考えられる。

また、石錘の出土状態についても本遺跡では石開いの炉を中心に数十個が集中して発見されており(沢1969b), 平和遺跡においても同じような結果が得られている。石錘そのものを考える好材とも理解される。

本遺跡からは、まったく打ち欠きをもたない自然石が63個出土した。グラフにも示したとうり、重量からおしはかっても明らかに石錘用の自然石と考えられる。

また、石匙については、これまで尖底貝殻文土器群に伴出する代表的な石器として位置づけられてきた。更に石匙の機能を発展させ、尖底貝殻文土器をもつグループの文化様態についても論じられているところである(林1966)。

しかし、出土状態について述べられておらず確実例として促えることに難はあろうが、平和遺跡において下頃辺上層式土器に縦形石匙の伴出例が図示されている(明石1971, P66, 第43図)。むしろ平底土器群のグループについても、再検討を試みる必要があるのではなかろうか。

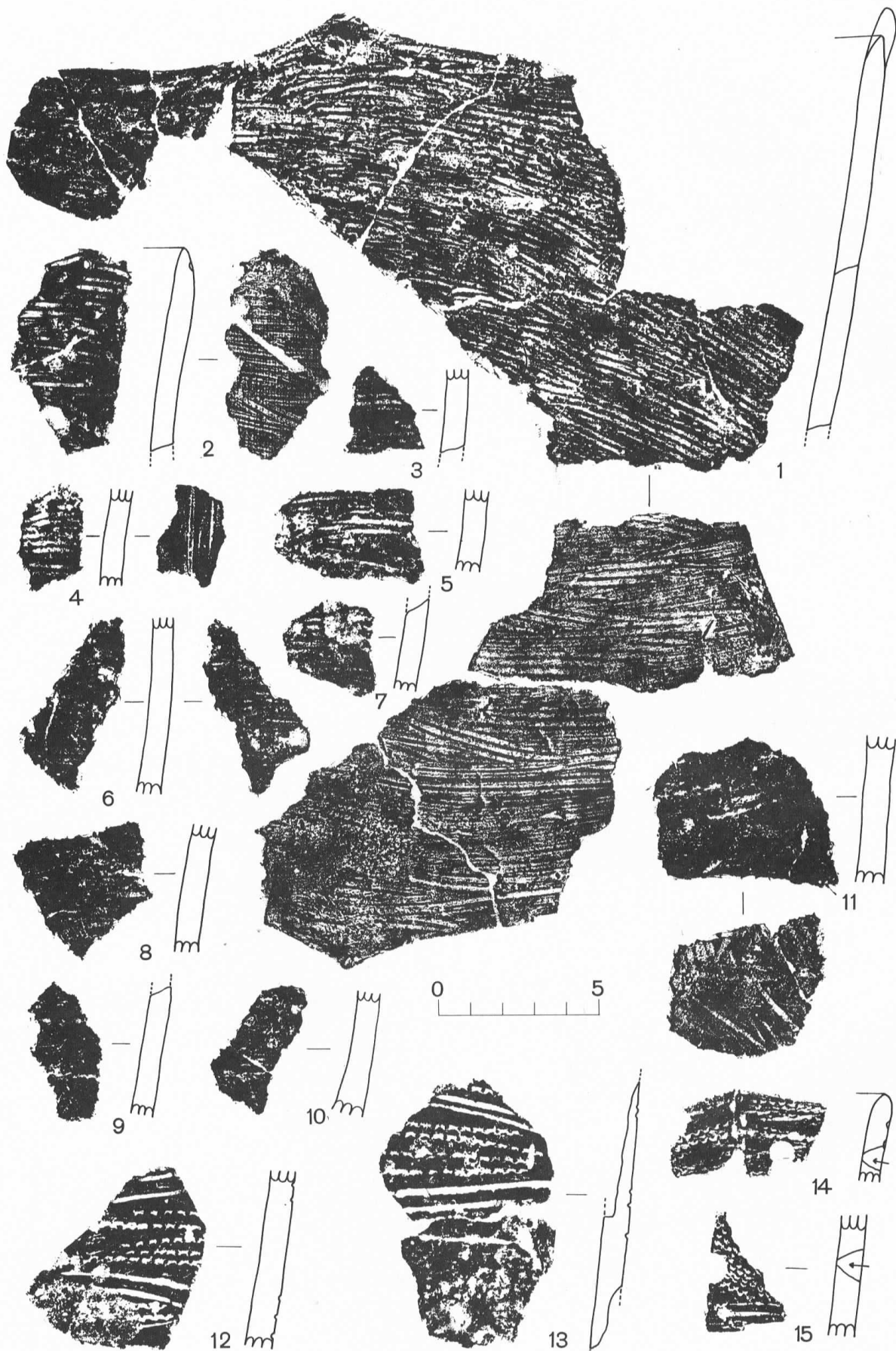
以上、簡単に本遺跡出土の石器群について触れてきたが、道内における平底のグループに伴出するそれらと共通した組成を摘出することができる。しかし、個々に特徴的な石鏃 グレーバーは別として、石錘、剥片石器等については詳細なデータに乏しく比較検討が困難であり、後日、更に資料の増加を待って検討を試みたい。

ま と め

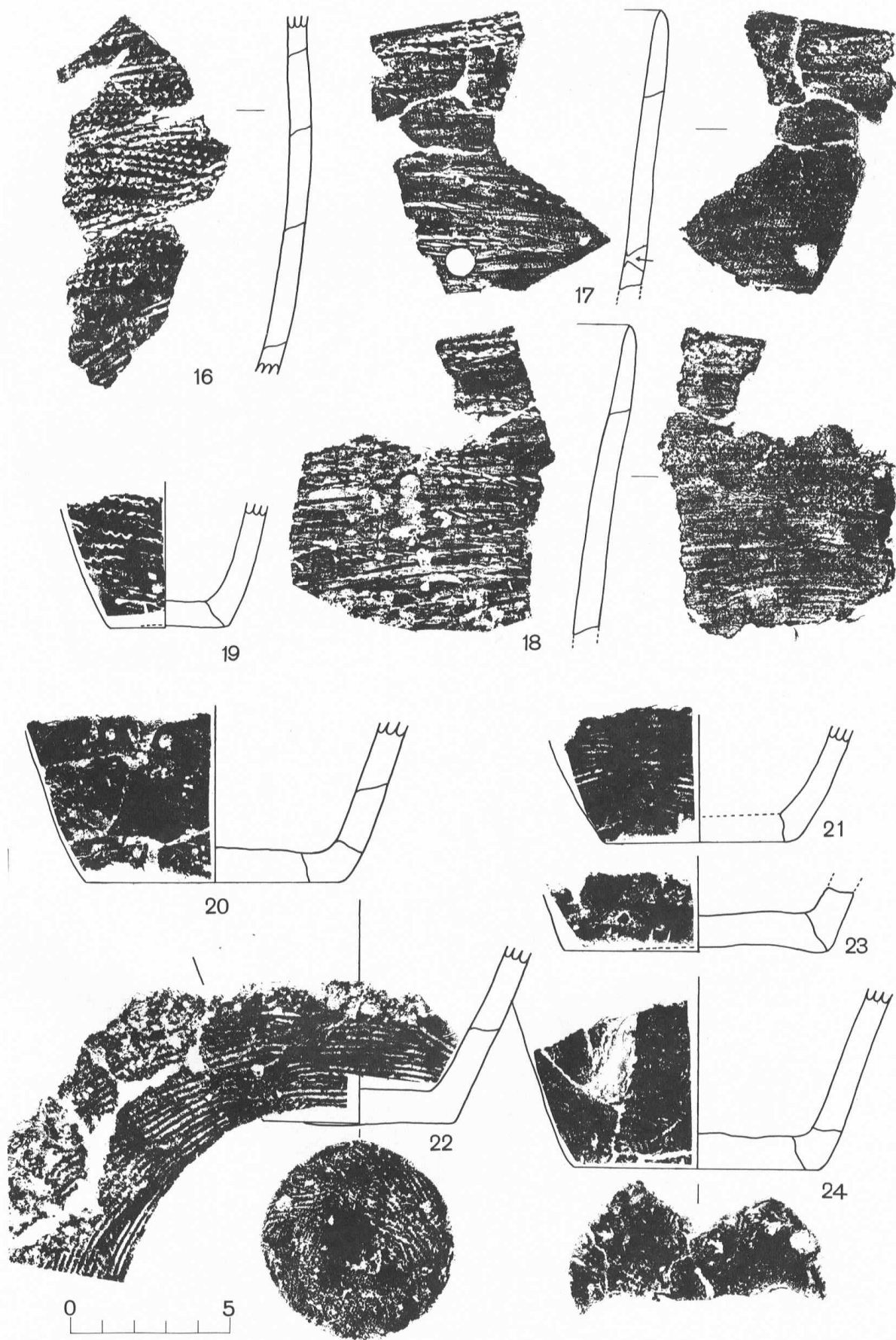
本稿では、沼尻遺跡出土の遺物について触れたが、紙数に制限があり、意をつくして詳細に論じることができなかった。後日、あらためて更に検討を試みたい。

参 考 文 献

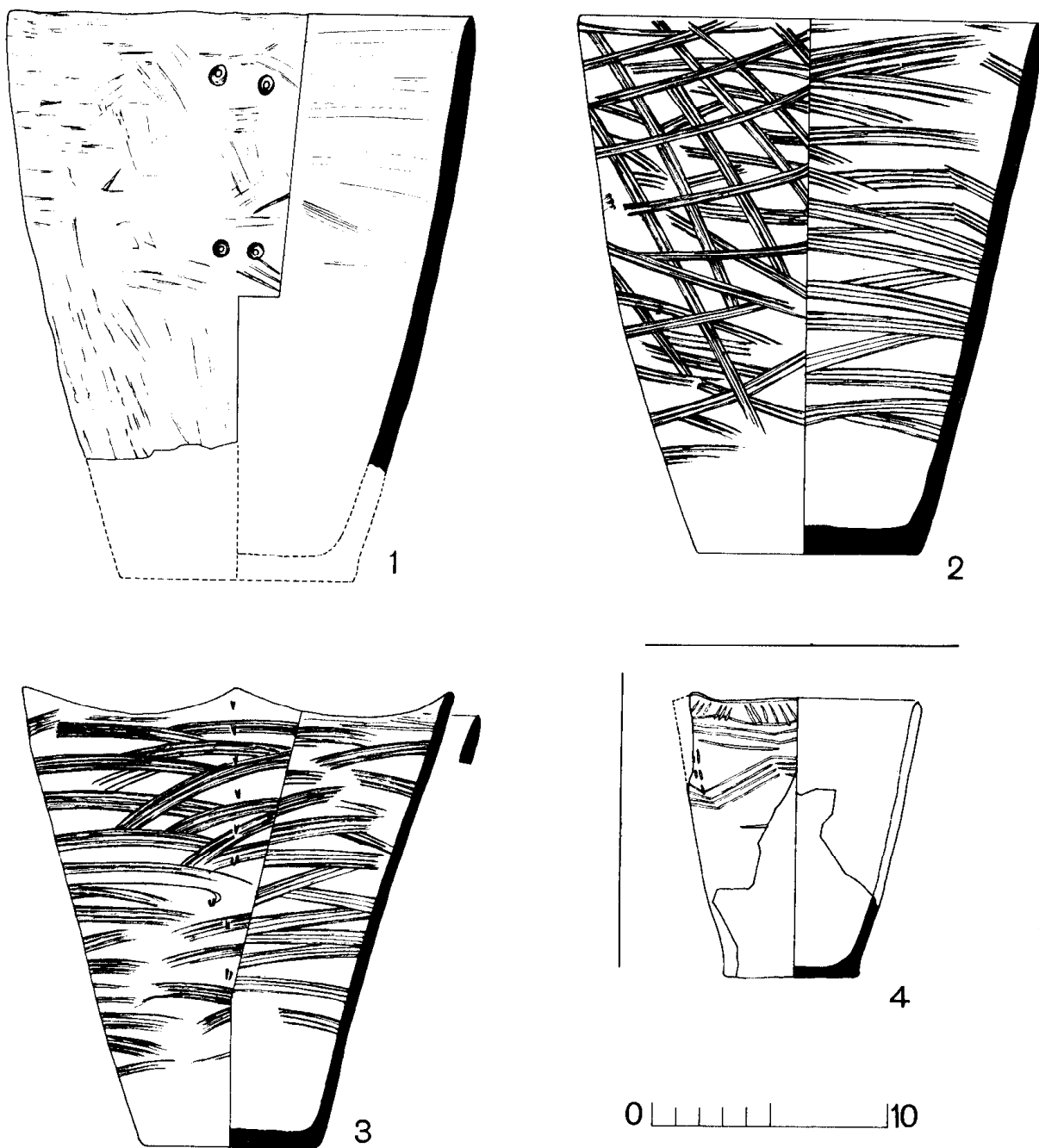
- | | | | |
|---------------------------------------|-------------------|---|-----------------|
| 明石博志(1968)「浦幌町平和遺跡」第1輯 | 浦幌町教育委員会 | 沢 四郎(1959)「釧路地方の先史時代についての覚書」 | 釧路の古代文化 第1輯 |
| 明石博志(1971)「平和遺跡」 | 浦幌町教育委員会 | 沢 四郎(1961)「道東に於ける早期縄文土器編年覚書」 | 釧路の古代文化 第3輯 |
| 林 謙作(1966)「東北・北海道の貝殻文土器群」 | 北海道青年人類学研究会々誌A6.6 | 沢 四郎(1962a)「縄文早期沼尻式土器」(解説) | 釧路博物館報 A6.124 |
| 本村英明(1967)「北海道先土器文化終焉に関する一理解」 | 古代文化 19巻2号 | 沢 四郎(1962b)「縄文早期沼尻式土器」(解説) | 釧路博物館報 A6.125 |
| 児玉作左・門・大場利夫(1953)「函館市住吉町遺跡の発掘について」 | 北方文化研究報告 第8輯 | 沢 四郎(1962c)「沼尻式土器のまとめ」 | 釧路博物館報 A6.126 |
| 河野広道・沢四郎他(1962)「東釧路」 | 釧路市教育委員会 | 沢 四郎(1962d)「石錘について」 | 釧路博物館報 A6.127 |
| 河野本道(1967)「枝幸町の先史時代」 | 枝幸町史 | 沢 四郎(1969a)「道東に於ける早期縄文土器の編年について」 | 釧路史学 創刊号 |
| 河野本道・岩崎隆夫・宇田川洋(1970)「先史時代」 | 江別市史 | 沢 四郎(1969b)「釧路川流域の先史時代」 | 釧路史学 第11巻「釧路川」 |
| 峰山 巖(1963)「本村古地」 | 北海道的文化 特集号 | 沢 四郎編(1972)「釧路市緑ヶ岡S.T.V遺跡発掘調査報告書」 | 釧路市立郷土博物館紀要 第1輯 |
| 名取武光・峰山 巖(1954)「伊達町北黄金遺跡の発掘報告」 | | 沢 四郎 他(1971a)「東釧路第1地点(東釧路貝塚)の発掘」(昭和45年) | 釧路博物館報 A6.209 |
| 岡崎山夫・沢 四郎(1970)「縄文時代早期の釧路」 | 新釧路市史会報 4巻3号 | 沢 四郎 他(1971b)「東釧路第1地点(東釧路貝塚)の発掘」(昭和46年) | 釧路博物館報 A6.212 |
| 大場利夫 他(1955a)「函館市梁川町遺跡」 | 市立函館博物館 | 高橋正勝(1967)「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について」 | 石器時代 第8号 |
| 大場利夫 他(1955b)「檜山南部の遺跡」 | 江差町・土ノ国村教育委員会 | 竹田輝雄(1956)「北海道豊浦町アルトリ遺跡について」 | 土代文化 第26輯 |
| 大場利夫・奥田 寛(1960)「女満別遺跡」 | 女満別町教育委員会 | 山崎 哲(1969)「沼尻式土器の新発見地」 | 釧路博物館報 A6.200 |
| 大場利夫・扇谷昌康・竹田輝雄(1962)「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」 | 北方文化研究報告 第17輯 | 米村哲英(1965)「網走市柱ヶ岡出土の貝殻文土器」 | 北海道考古学 第1輯 |
| 大場利夫・棚瀬善一(1965)「大樹遺跡」 | 大樹町教育委員会 | 古崎昌一(1965)「縄文文化の発展と地域性」北海道 | 日本の考古学 II |



第3図 釧路市沼尻遺跡出土の土器拓影

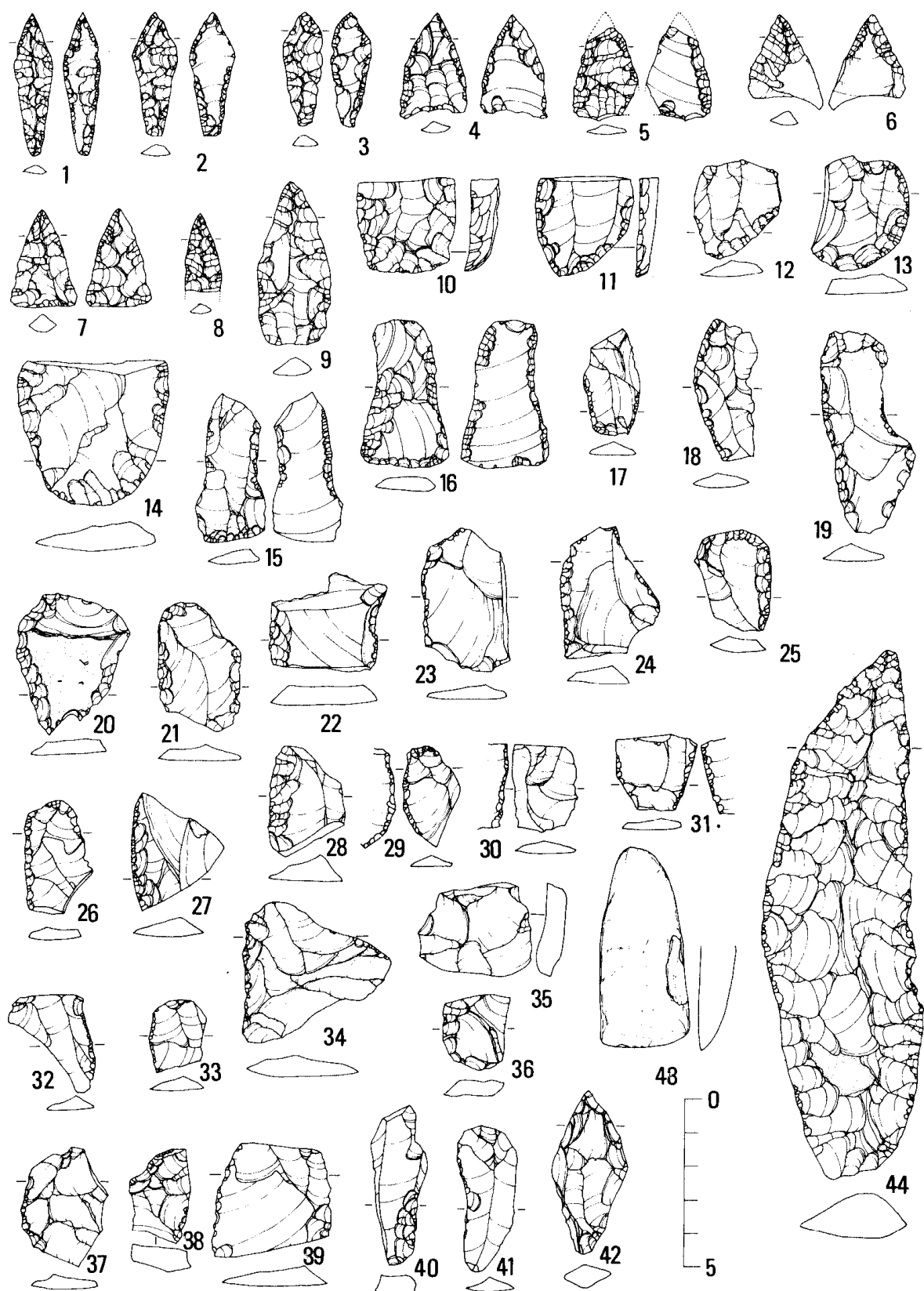


第4図 釧路市沼尻遺跡出土の土器拓影

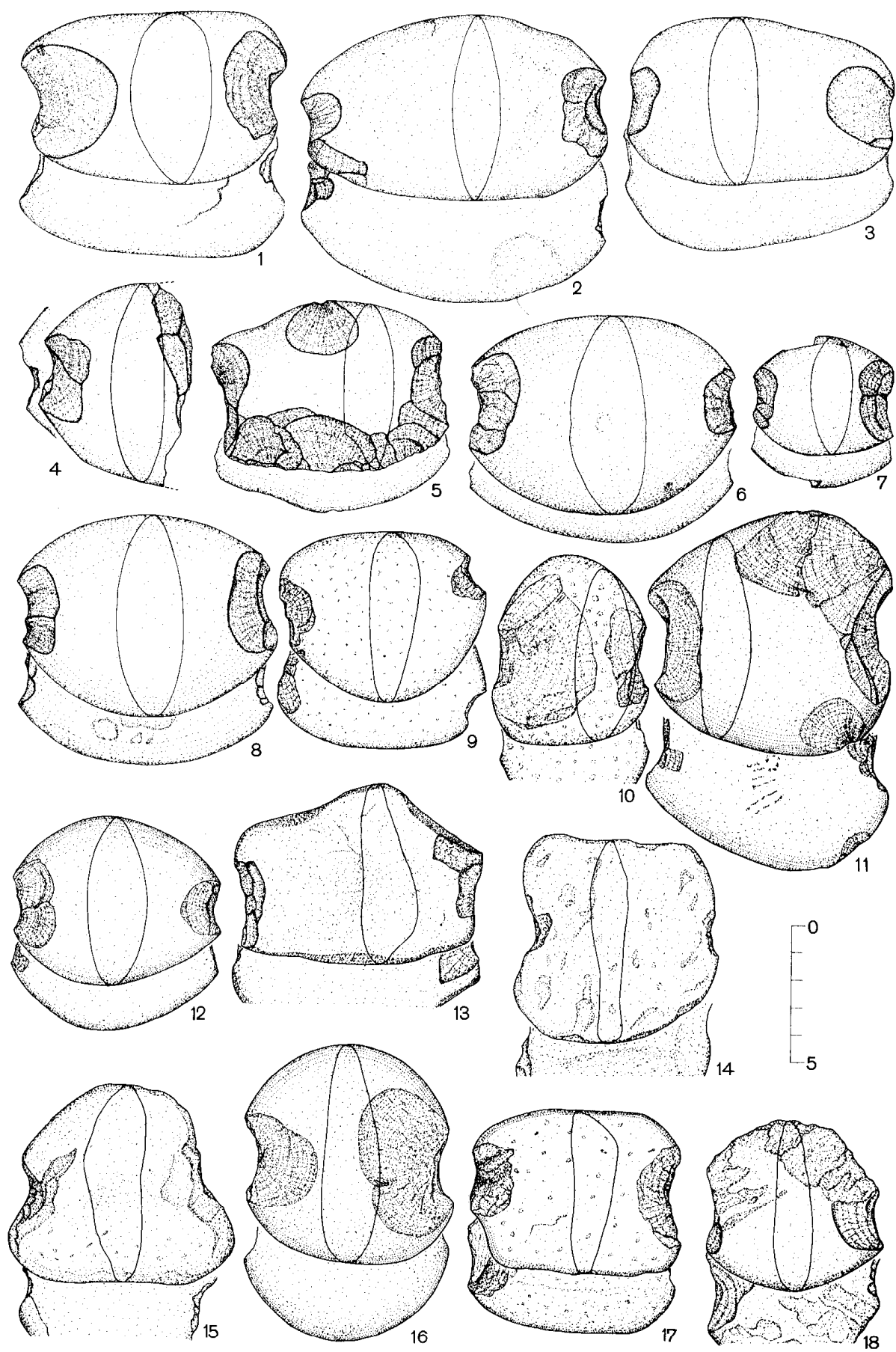


第 5 図 釧路市沼尻遺跡及び東釧路遺跡第Ⅱ地点出土の土器実測図

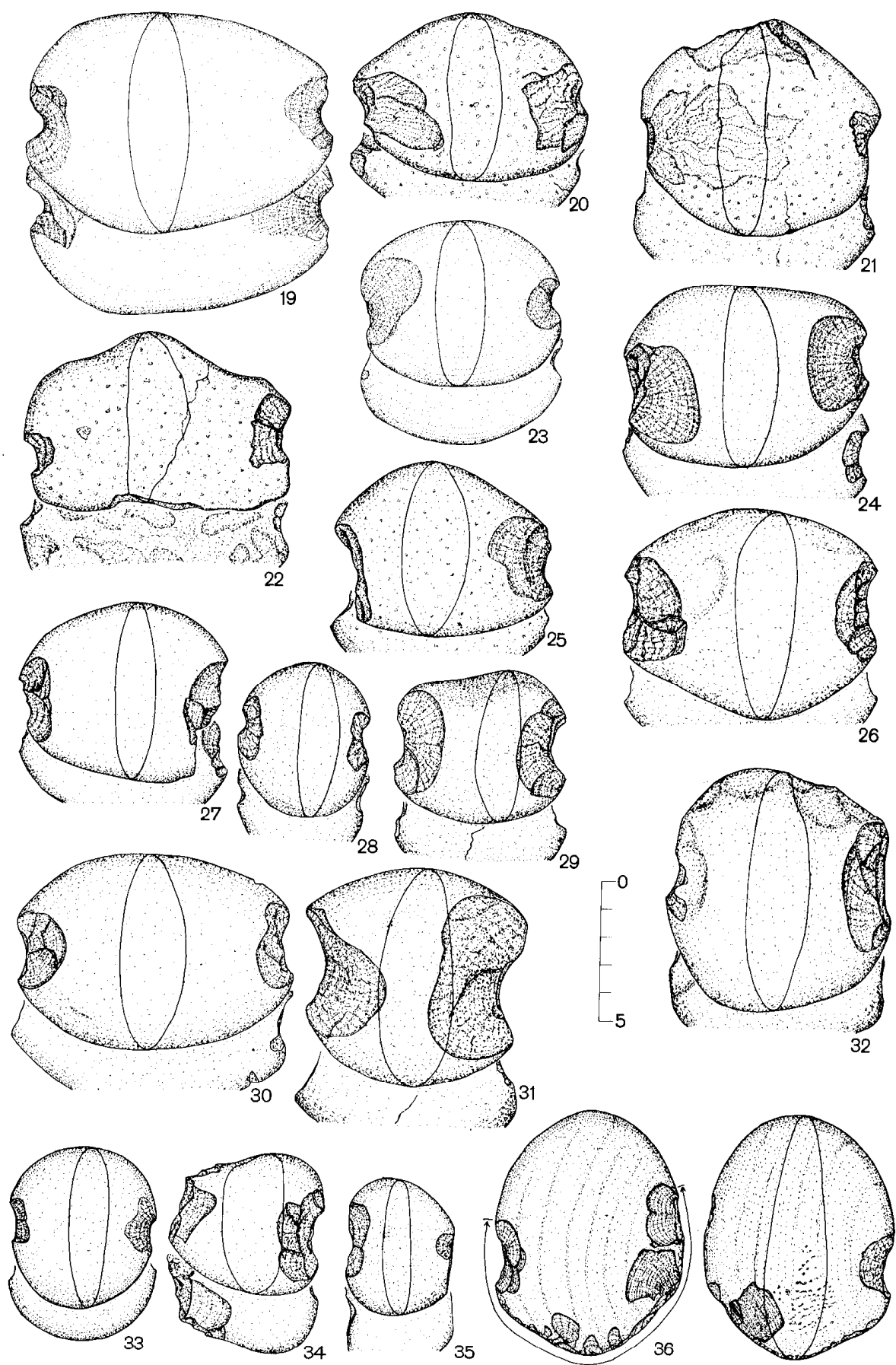
- 1 ~ 3 沼尻遺跡
4 東釧路遺跡第Ⅱ地点



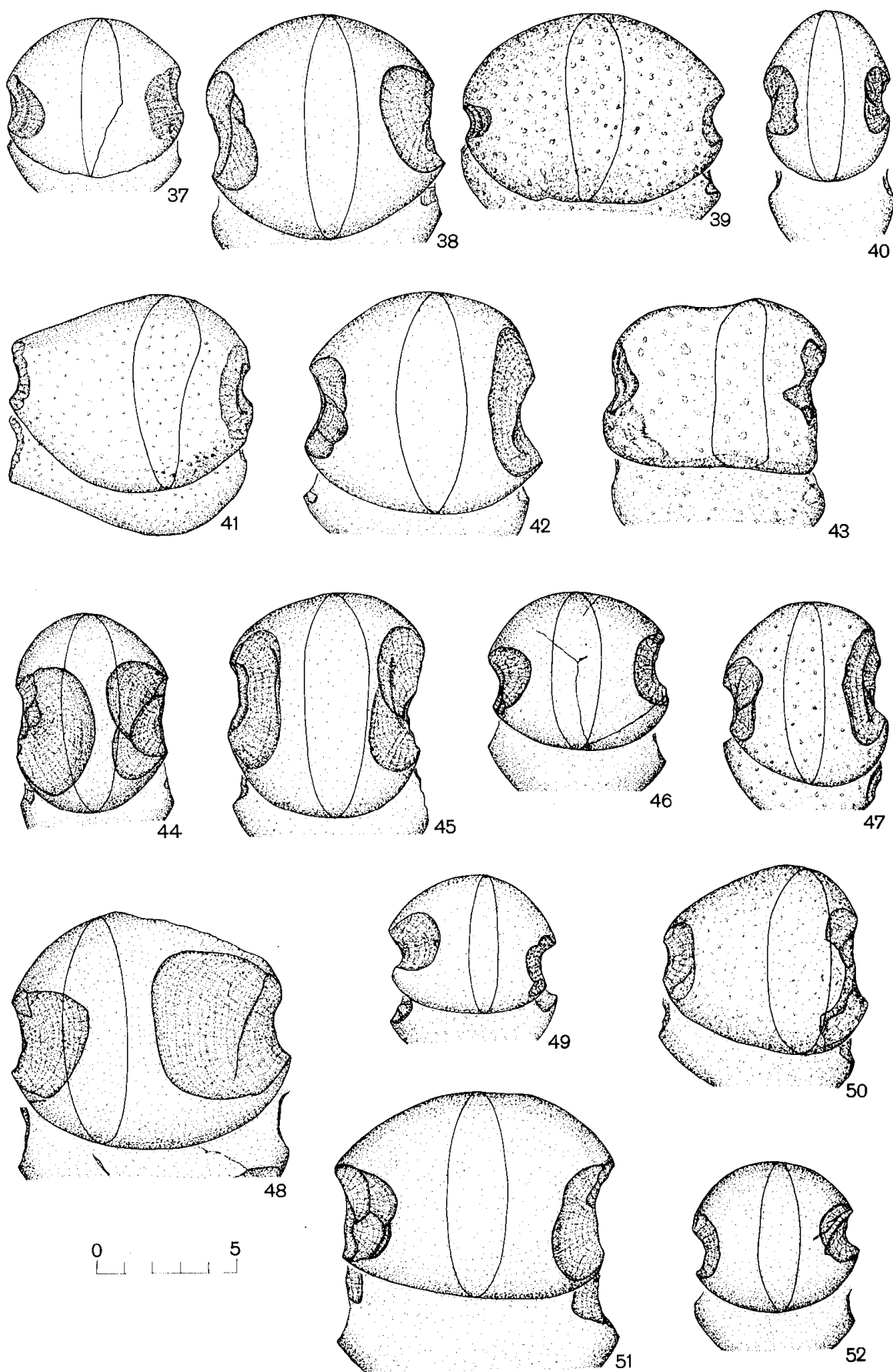
第 6 図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



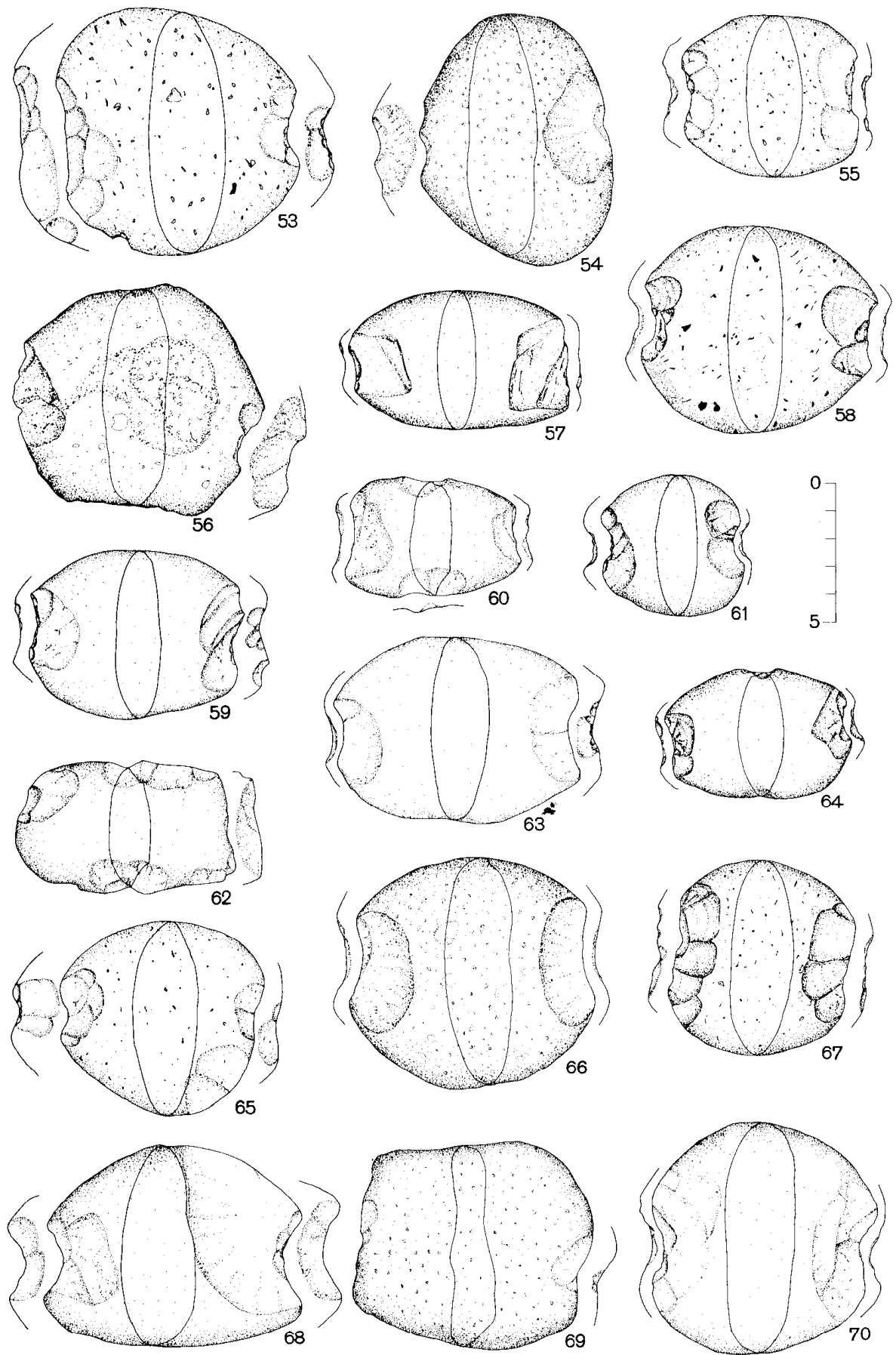
第7図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



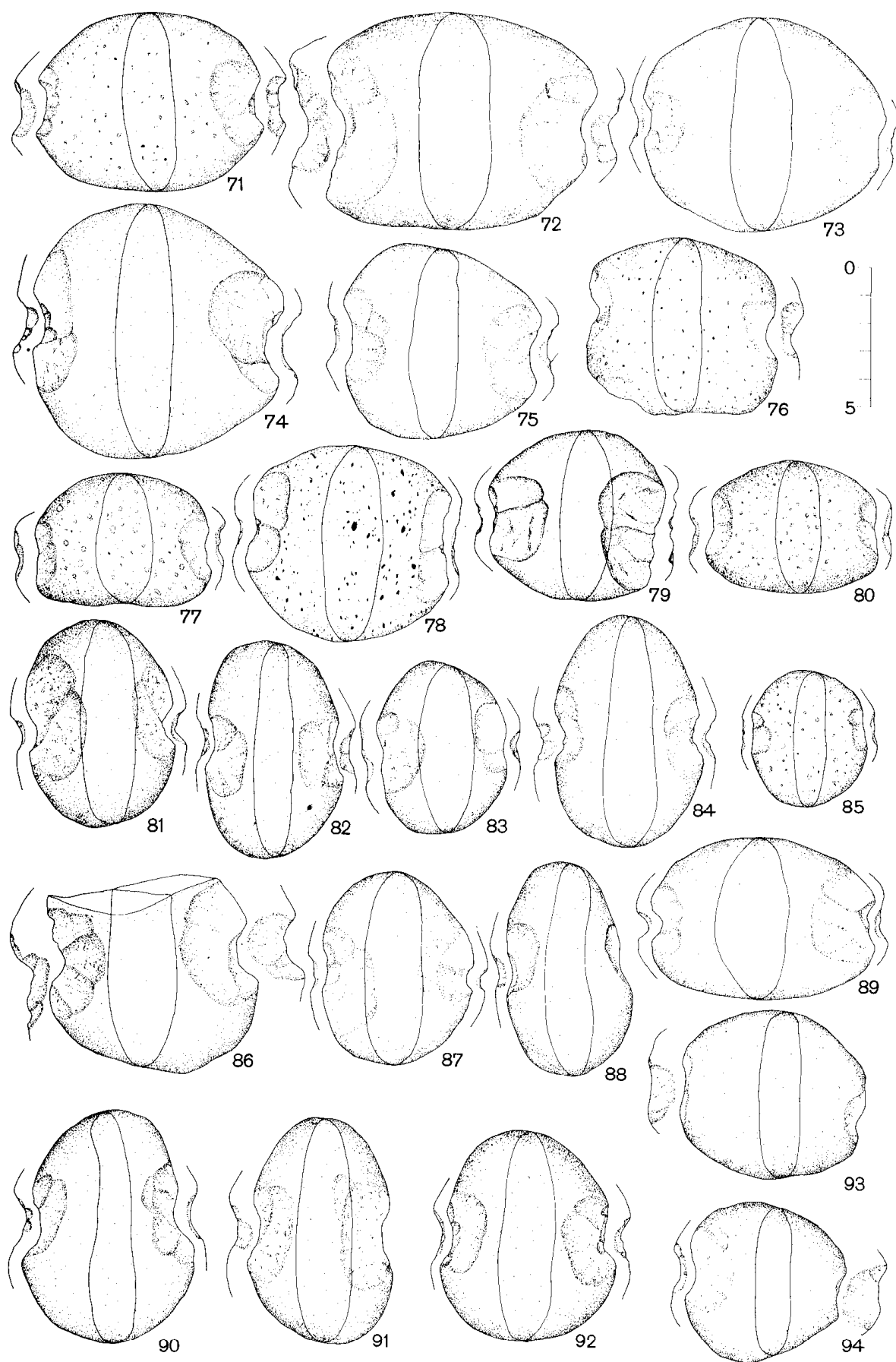
第 8 図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



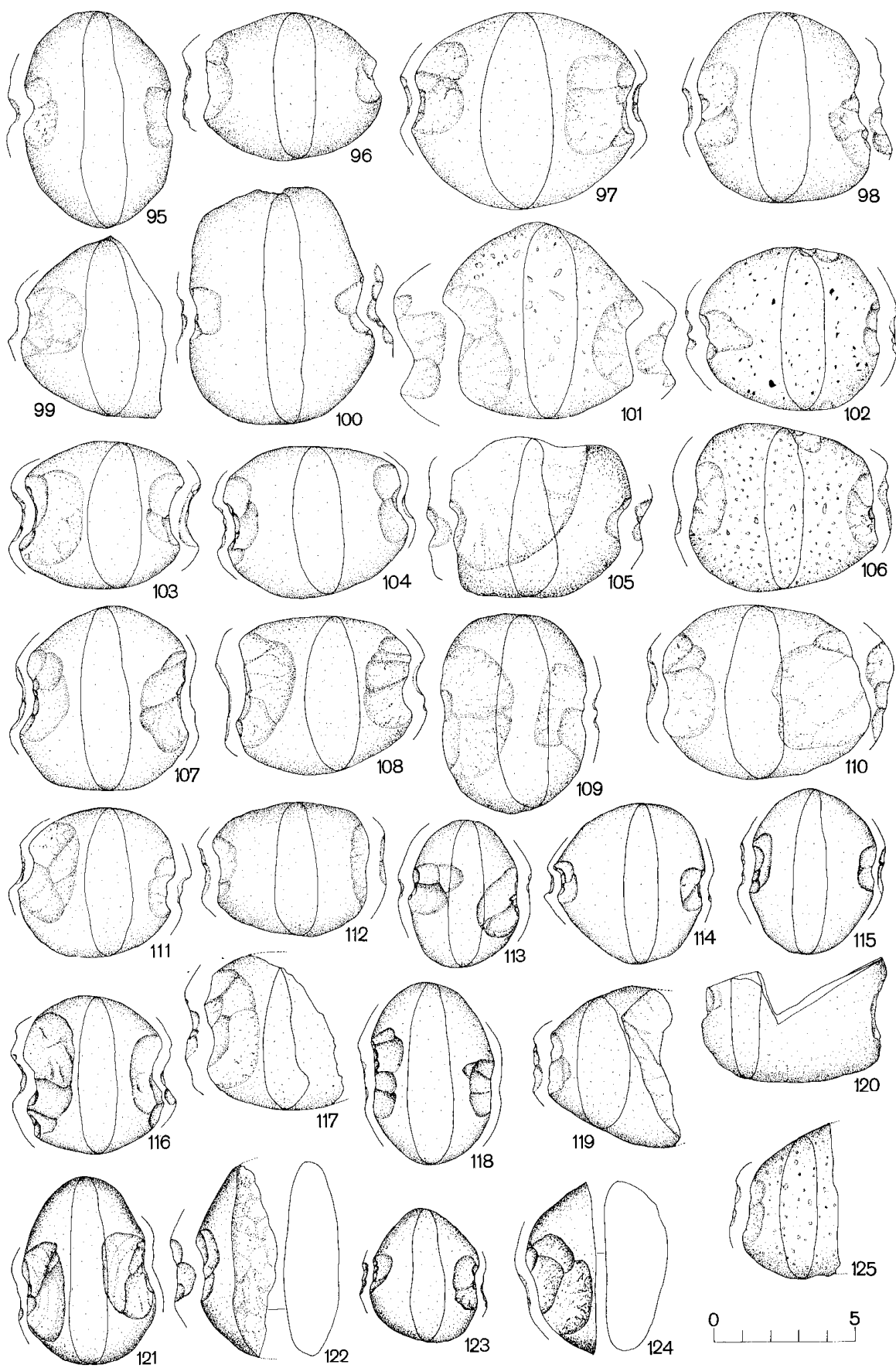
第9図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



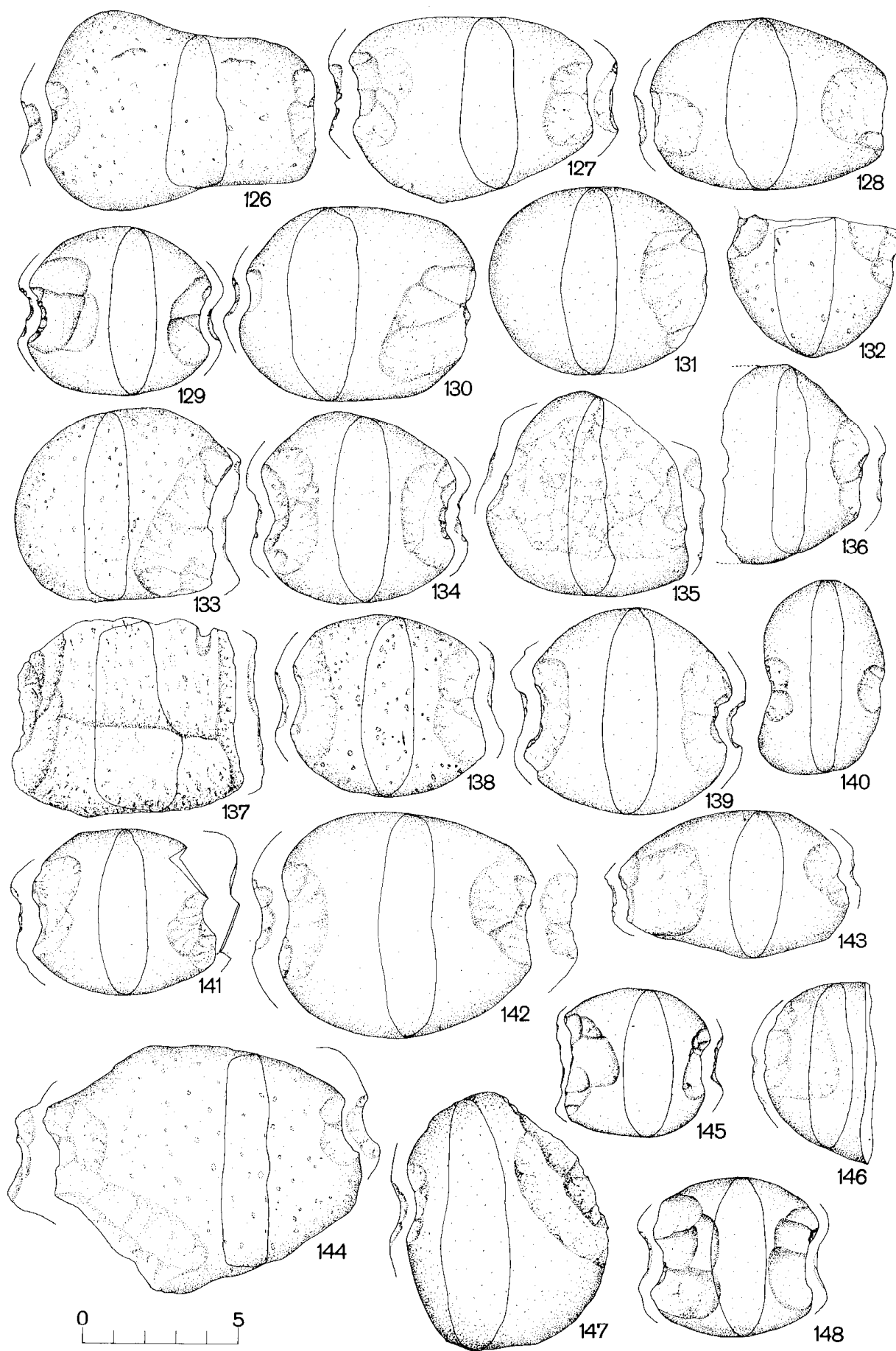
第10図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



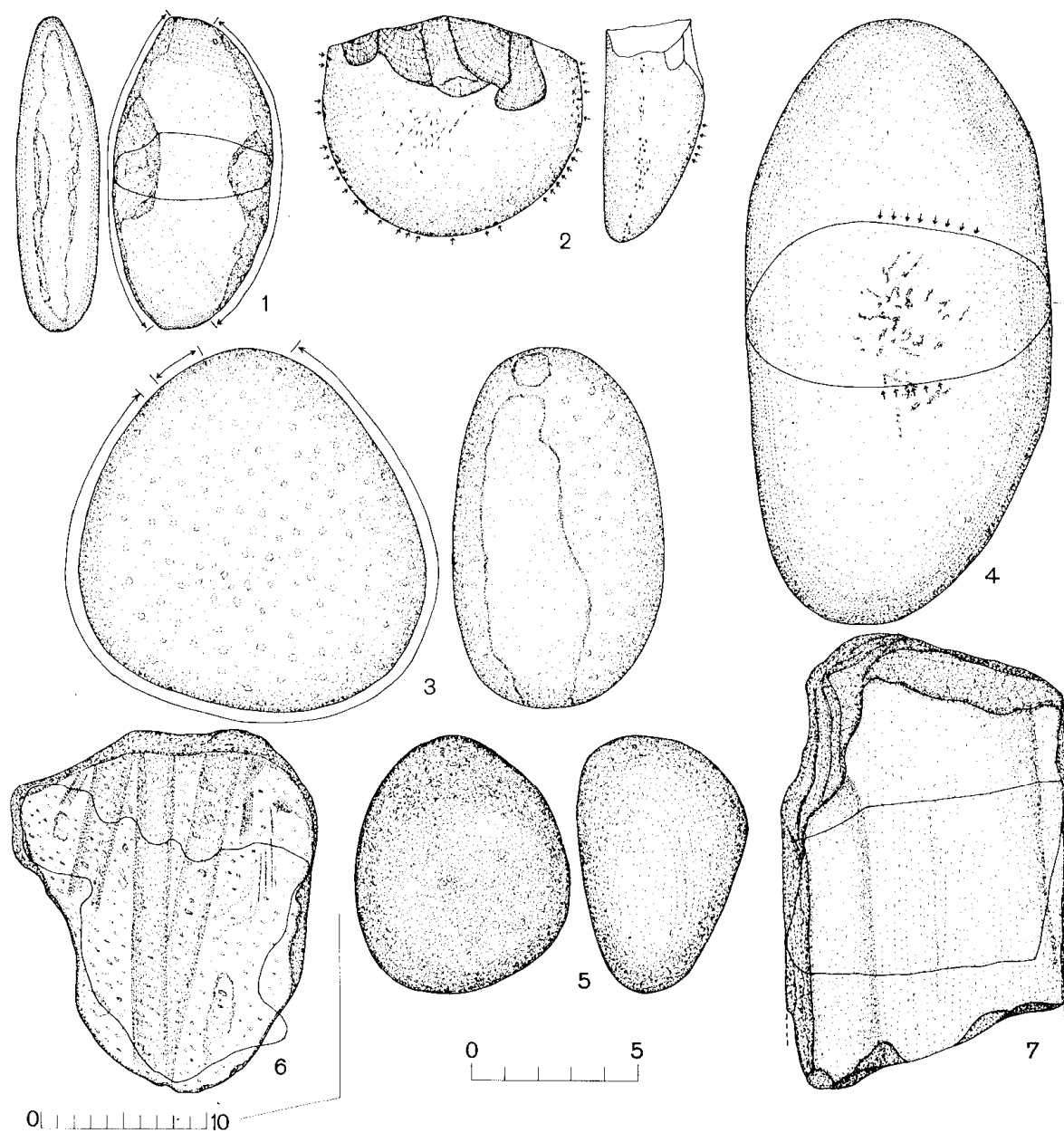
第11図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



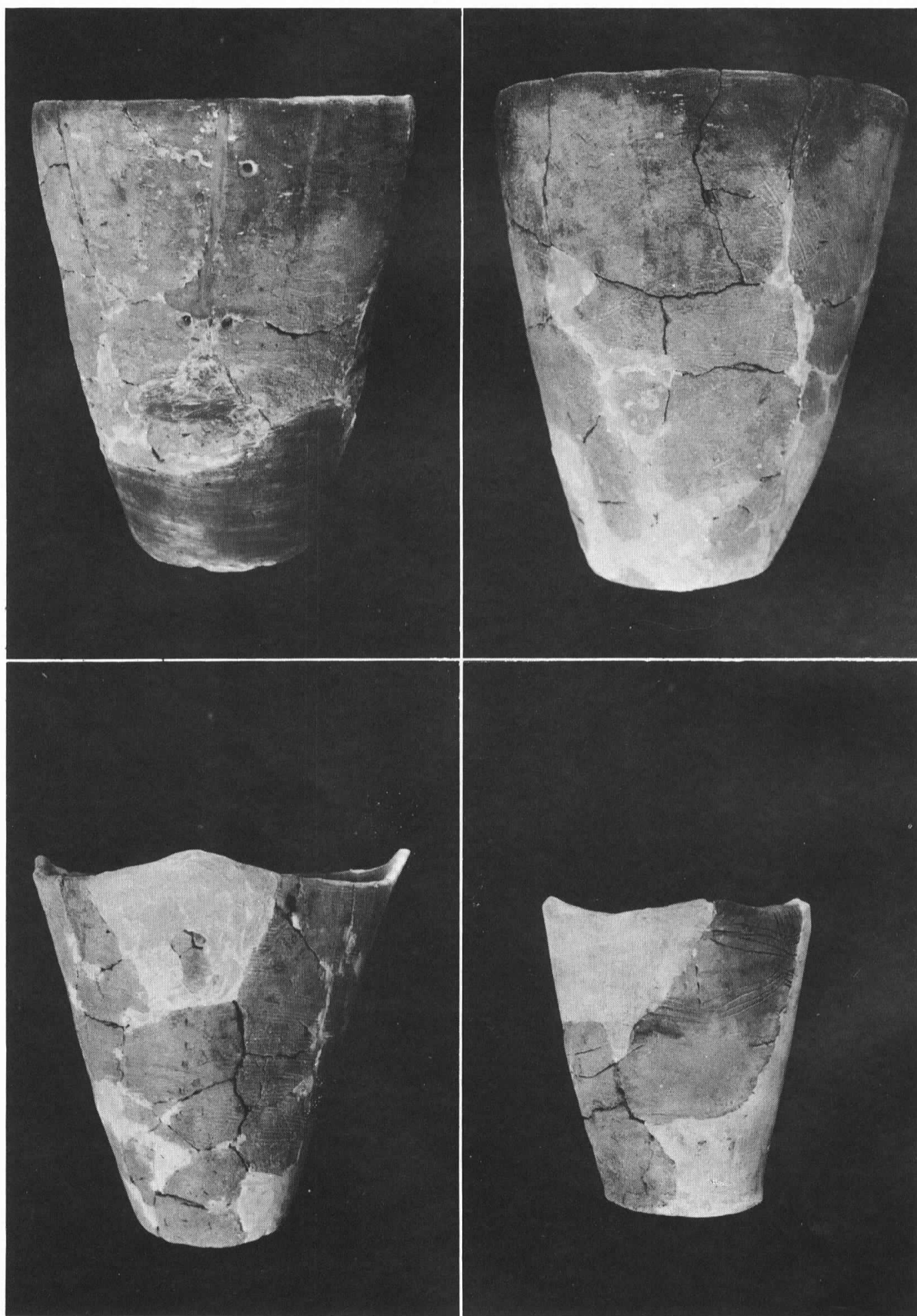
第12図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



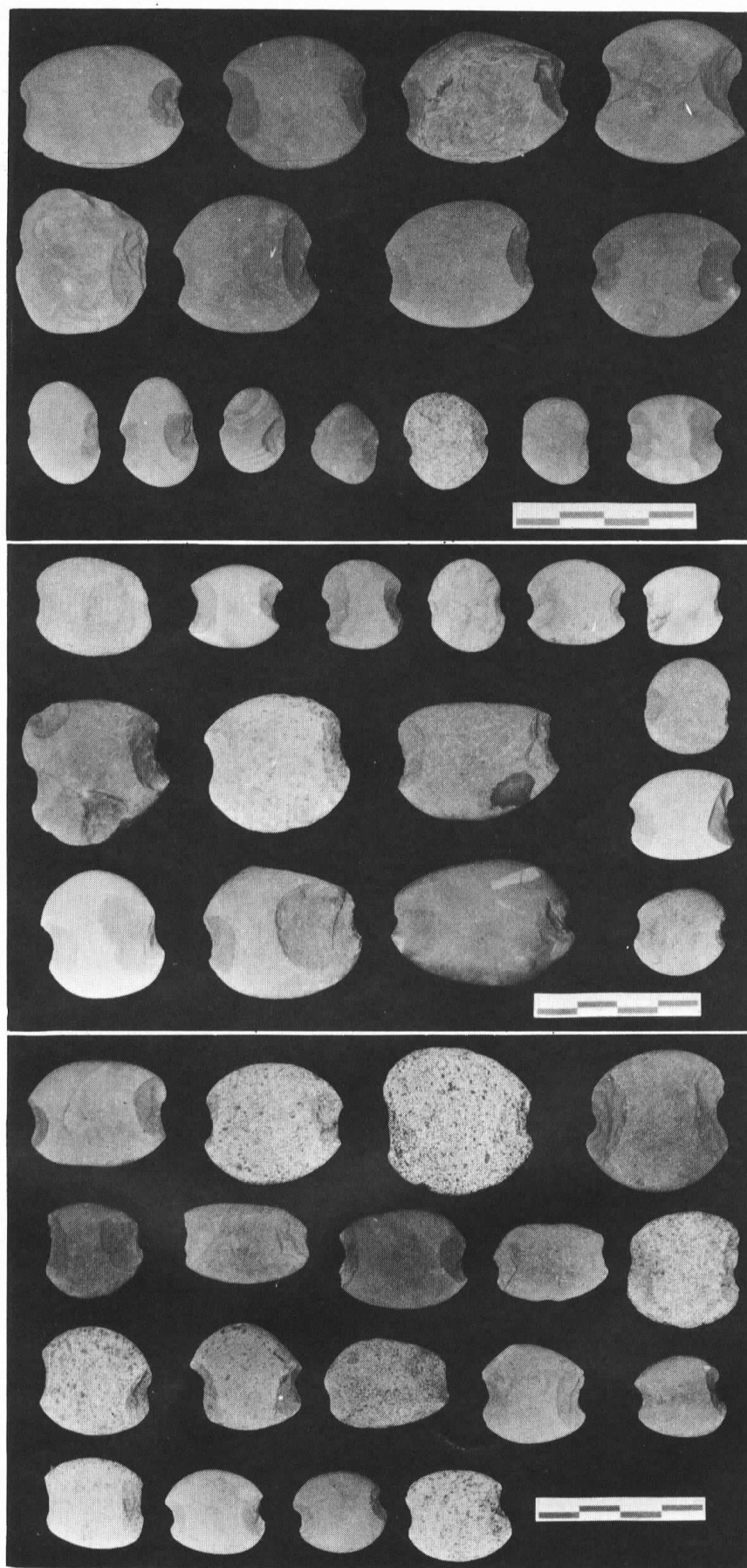
第13図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



第14図 釧路市沼尻遺跡出土の石器実測図



図版 1 釧路市沼尻遺跡及び東釧路遺跡第II地点(右下)出土の土器



図版 2 釧路市沼尻遺跡出土の石器